

初等英語教育における部分的 CLIL を取り入れた授業実践

—社会科との統合実践を通して—

M17EP004

太田 圭

1. はじめに

2017年3月、文部科学省より次期学習指導要領が公示された。その中で、小学校中学年にはこれまで高学年で行われていた外国語活動を、そして高学年からは教科としての英語が導入されることが示された。これにより児童が小学校在学中に英語に触れる期間がこれまでの2年間から4年間へと倍となり、小中高を合わせて10年間の英語教育が始まることになる。

現行の学習指導要領では外国語活動の目標は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」となっている。あくまでも素地を養うことを目標としているのであり、具体的に外国語の文法や語彙などを知識として学ぶことは意図されていない。外国語が話される場面や話し方などから、相手が伝えようとしている意味や意図を類推することを体験的に学ばせている。これが次期学習指導要領では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」となっている。親しむことが中心だった外国語活動とは異なり、具体的に英語のスキルを育てることに主眼が置かれることとなった。また、評価が入ってくることも大きな違いである。小学校英語教育はこれから大きな転換点を迎えることになる。

2. 研究の目的

筆者自身が小学校英語教育に携わってくる中で、発音を繰り返すだけの単語カード、チャンツやゲーム等の遊び中心の活動、そして不自然な場面設定のもとに行われるコミュニケーションがあまりにも多いと感じてきた。また、発達段階を考えても、小学校高学年児童(11~12歳)は知的好奇心が高まり、興味関心の範囲も多岐にわたる時期である。単調な活動、言い換えれば思考活動を伴わない学習ではすぐに飽きてしまい、コミュニケーションを図るための資質・能力の基礎を伸ばすところまで至れないのではないか。この課題意識が本研究の出発点となった。そして児童の興味関心に対応して知的好奇心を刺激しつつ、内容や思考活動を伴う手法を模索していた時に出会ったのが CLIL (内容言語統合型学習) (Content and Language Integrated Learning) の考え方である。本研究では英語科と社会科を統合した CLIL の実践を小学校にて行い、動機づけやコミュニケーション能力育成の観点からどのような効果があるのかを探ることを主な目的とする。加えて、現職の小学校教員の立場を生かして単元構成・教材作成を行うことで、CLIL が小学校現場でいかに運用できるのか検証していく。

3. 仮説

(1) 理論的枠組み

CLIL は、もともとヨーロッパの EFL 環境下で始まり、1990 年代に発展してきた教授法である (池田, 2011)。他教科の内容を英語の学習の中に取り込むことで、幅広い領域の語彙を扱いながら自然な形で場面設定を行うこ

とを可能とする考え方である。つまり教科学習と語学学習を教科横断的に結びつけ、学習の相乗効果を狙うのが CLIL の目標の一つと言えるだろう。教科横断的な指導については、文部科学省の次期学習指導要領(2017)の中でも「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語や音楽科、図画工作科など、他の教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」(3.1.エ)と示されている。しかし、先進的な一部の私立学校の事例を除いて、CLIL を取り入れた英語教育を行っている公立小学校はまだ少ない。そのため、他教科との統合による効果はまだ検証の段階であると言える。

CLIL には4つのCと呼ばれる原理がある。①内容(Content)、②言語(Communication)、③思考活動(Cognition)、④文化・国際理解/協同学習(Culture/Community)の4つの軸で構成されている(図1参照)。それぞれの軸は既に英語教育の中で主張されているものだが、これらの要素を融合し、教科と語学ともに深めていく部分が CLIL の特徴である。

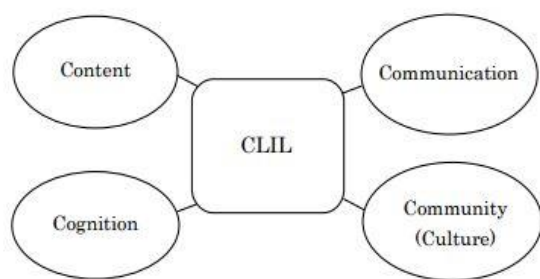


図1

(2) なぜ CLIL なのか

筆者が研究の目的の項で挙げた課題意識に対して CLIL を通して解決策を模索した理由は以下の二点である。

一つ目の理由は、小学校は教科担任制ではなく、基本的に全教科を一人で行う学級担任制という点である。複数の教科内容に対して知識を持ち、加えて一日の大半を児童とともに

に教室で過ごす小学校教員だからこそ、児童の興味関心を捉え、教科間の繋がりを意識した授業を構想できると考えた。また、教科内容を取り入れることで授業の中に自然にテーマ性を生み出せると考えた。教科の内容を扱うことで、授業内容が高度化する恐れもあるが、高学年の児童は他教科を通して既にかなり高度な内容の学習をしている。言語のレベルが下がるからと言って、知的レベルを下げる必要はなく、むしろ年齢相応の内容を扱うことが学習意欲の向上につながることを藤田(2017)により指摘されている。

二つ目の理由は、CLIL を用いて教科と語学を統合することで、他教科での学びを生かすことができる点である。二五(2015)が作成した CLIL の授業における言語習得の概念を筆者がアレンジしたものが図2である。Input から Output への流れはどの言語習得理論も共通している部分が多い。筆者は CLIL を取り入れることで Processing(言語処理)の段階で教科の内容から「思考活動」と「協同学習」のタスクを多く設定することが可能となると考えた。授業者としてどのようなタスクを組み込むか工夫の余地が大きく、この部分の改善から児童の意欲を喚起することができると考えた。

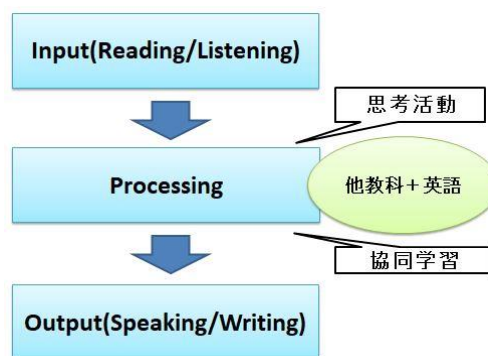


図2 二五(2015)に基づいて筆者が修正

4. 研究の方法

(1) 対象

実習校：山梨県 A 小学校

実習期間：平成 28 年 5 月～12 月（週 1 回）

授業実践：12 月上旬（全 5 回）

対象：5 年生（35 名のクラス）

研究対象校は、文部科学省の教育課程特例校制度により 1 年生から教科としての英語が実施されている。そのため、外国語活動としてではなく通常の教育課程の教科の一つとして授業が行われているのが特徴であり、児童の自己評価と教員の観察に基づく形での評価もなされている。高学年からは文字の指導も始まっており、今後正式に教科化された際の CLIL の有効性を検証するのに適している環境であると考ええる。

(2) ねらい

本研究のねらいは以下の二点である。

- ① 社会科の内容を取り入れた教科横断的指導が、高学年児童の学習意欲を高めるかどうか授業実践及び児童のワークシート・アンケートを通して検証する。
- ② 授業者として CLIL の 4 原理をどのように取り入れて授業を構成するのか、また、実際の現場で運用可能な手法であるか検証する。

5. 授業構想の概要

(1) 教材

単元「英語で山梨を紹介しよう」

本単元は実習校の 5 年生年間指導計画『都道府県で遊ぼう』をベースにし、より山梨県の有名のものの内容にフォーカスして構成した独自単元である。“be famous for～”の表現を使いながら、山梨県の特産品や名所を尋ね合い、紹介し合う活動を行う。CLIL（内容言語統合型学習）の手法を部分的に取り入れ、

英語科と社会科の学びを両立させることを狙っている。教材設定の背景として、小学校 3 年生では地域を、そして 4 年生では県全体の内容を社会科で既に学習している。そのため、既習事項が随所に出てくることで教科の統合が行いやすいと考えた。また、広く都道府県を扱うのではなく、より生活に密着した教材（自分の居住する県である山梨県）を用いることで、主体的なコミュニケーションが期待できると考えた。

教材として用いるのは山梨県立大学の高野美千代教授の研究グループが作成した Yamanashi English Card である。この A から Z までの山梨ゆかりの内容を扱ったカードを、カルタにしたりビンゴにしたり、形を変えて繰り返し触れさせることで定着を図った。また、より深い学びを実現するために拡大した白地図を活用しながら、特産品や名所の知識を市町村単位にまで落とし込んでいくことを目指した。そして単元の最後には、学習した山梨県の特産品や名所を 3 ヒントクイズの形にして、児童同士で出し合う活動を設定した。ワークシートを作成するにあたり『わたしたちの山梨』の市町村ページに掲載されている情報を参考にしながら、書き取りに採用する単語を選定した。

以上、英語科としては“be famous for～”と A～Z までの山梨イングリッシュワードを、社会科としては私たちが住む山梨県についてより深く知ることを、形式を変えつつスパイラルに触れさせながら学習していく単元を構想した。

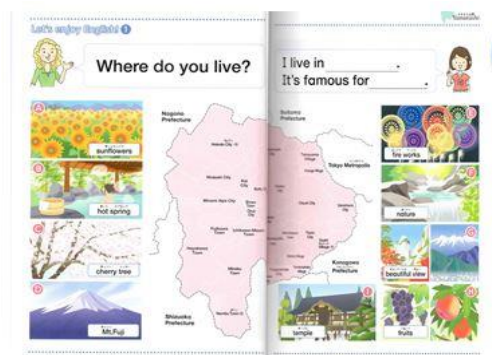


図 3 郷土学習教材「ふるさと山梨」

(2) 指導計画

計画作成の際に重視したのは、同一の教材をアレンジしながらスパイラルに触れさせることである。全5時間単元の中でA～Zまでの26単語を扱い、加えてYamanashi is famous for～名物, especially in～市町村～の表現を定着させるのは児童にとって負担が大きいと当初は考えた。しかし、扱う語彙の半数以上は日本語ですでに学習している事項であること、そして書き取りの分量や情報の提示の仕方の工夫などによって指導者側の配慮で克服していくことができるとの考え、実践を行った。教材の工夫や活動時の児童の様子は実践結果と考察の項にて詳述することとし、実際に行った指導計画(表1)を以下に示す。

表 1

時間	主眼・学習活動	評価基準・評価方法	使用表現
1	山梨県にはどんな有名なものがあるのか知ろう。 ・ Yamanashi English Card ・ Yamanashi English カルタ ・ ワークシート (ライティング)	・ ALT の話から外国の有名なものを知ることができる。 【異】 ・ 山梨県の有名なものを知ることができる。 【理】	・ Yamanashi English Card A～Z ・ be famous for～
2	山梨県の有名なものを紹介する言い方を知ろう。 ・ Yamanashi English Card ・ Yamanashi English BINGO ・ ワークシート (ライティング)	・ 山梨県の有名なものを、県内どの市町村でとくに有名なものか知ることができる。 【理】 ・ 山梨県の有名なものを聞き取り、単語を正しく書き写すことができる。 【表】	・ Yamanashi English Card A～Z ・ be famous for～ ,especially in～.
3	山梨県の有名なものを尋ねたり、紹介したりする言い方を知ろう。 ・ Yamanashi English Card ・ Communication Game ・ ワークシート (ライティング)	・ 山梨県の有名なものを紹介したり、尋ねたりする活動に意欲的に取り組んでいる。 【問】 ・ 山梨県の有名なものを紹介したり、尋ねたりすることができる。 【表】	・ Yamanashi English Card A～Z ・ What is Yamanashi famous for? ・ be famous for～ ,especially in～.
4	山梨県の有名なものを使って3ヒントクイズを作ろう。 ・ Yamanashi English Card ・ ワークシート (ライティング)	・ 山梨県の有名なものを使った3ヒントクイズを作る活動に意欲的に参加している。 【問】 ・ 山梨県の有名なものを使って3ヒントクイズを作ることができる。 【表】	・ Yamanashi English Card A～Z ・ What is Yamanashi famous for? ・ be famous for～ ,especially in～.
5 本時	山梨県の有名なものを使った3ヒントクイズを出し合う。 ・ Yamanashi English Card ・ ワークシート	・ 山梨県の有名なものを使って作った3ヒントクイズで友達同士交流することができる。 【表】	・ What is Yamanashi famous for? ・ Hint, please. ・ It is～. It is in～. ・ Great/Close

(3) 4C の分類

教科間の連携を重視した CLIL の考え方では、活動全体が言語学習になってしまえば意味がない。本実践においては社会科の「内容」の学習も併せて伴っている点が重要である。そこで山野(2013)を参考にし、授業内容を CLIL の 4C 合わせて分類・整理して授業目標を作成した(表2参照)。

表 2

Content
社会科 山梨県の有名なものを英語で紹介したり尋ねたりする活動を通して、ふるさと山梨について理解を深める。
Communication
学習の言語 Yamanashi English Card にて扱われている山梨県の特産品や名所などの表現に慣れ親しむ。 Akeno Sunflowers, Kofu Basin, Crystals, Devil's Tongue, Ear Shell, Fujizakura, Giblets, Hoto, Inden, Jewelry, Kaki, Linear Motor Car, Minobusan Kuoaji, Nobel Prize Wimmer, Otsuka Ninjin, Dried Persimmons, Unique Grapes, Rihoku Rice, Shosenkyo, Take da Shingen, Yoshida no Udon, Ventforet Kofu, Nishijima-washi, Excellent Wine, Yawata-imo, KofuZoo, city, town, village
学習のための言語 be famous for～. be famous for～,especially in～. What is Yamanashi famous for? It is～. It is in～. Great. Close. など
Cognition
学習の言語の暗記・理解と学習のための言語の活用を通して、自分たちのふるさとである山梨についてより深く学び、紹介したり尋ねたりする際に学習言語を適用する。
Community/Culture
学習の言語を使用して山梨県の有名なものの3ヒントクイズを作り、友達同士で学び合う。 ALT の母国の有名なものについて知る。

山野(2013)は、CLIL における内容は学習者の言語習得のためのインプットの質と量の確保に必要不可欠であるとしている。また、和泉(2012)も学ぶに値するだけの価値があり、学習者にとって何らかの関連性が見出せるものでなくてはならない、と述べている。筆者は、我々自身が生活している山梨県を教材化し、その中から語彙を選定していくことでインプットの質と量を保証し、3・4年次の社会科の学びを生かせる単元と内容にすることで、関連性についても達成できると考えた。

(4) 教材作成上の工夫

毎時間授業者が作成したワークシートを使用した。ただの書き取りプリントにならないために、授業内で扱う表現や情報も載せることで、思考活動の拠り所となる様に工夫した。

具体的に一つ目は、活動に慣れつつ、少しずつ活動の負荷が高まる様に、第一時はライティングを4語、第二時は4語と1文、第三時は6語と2文、第四時は1語と3文、と分量を少しずつ増やしていった。回数を重ねるごとに児童の活動のスピードが上がっていった。加えて、残りの授業時間を見ながら書き取りの回数を調整する等の指示を出すことで、

無理なく活動を行うことができた。

二つ目は、提示する情報をワークシートの中に最初は日本語表記で載せ、次第に英語表記のものへと入れ替えていったことである。本実践において、多くの場面で活用した白地図がこれにあたる。児童は市町村の位置を漠然とは把握している。しかし、最初から英語表記で活動が始めてしまうと、内容を深めていく際の障害になると考えた。導入は日本語で無理なく行い、徐々に慣れさせていった。

6. 実践結果と考察

(1) 各時間の概要

①第一時

本単元の導入として、いきなり山梨県を提示するのではなく、ALTのふるさとであるアメリカ・ニュージャージー州は何が有名なのかPPTを使って紹介してもらった。その後Yamanashi English Cardを使いながら親しませていった。英語科と社会科の統合授業であることは一切児童には伝えていないが、「それ4年生の頃に習った」、「あれ、知っているけどどうしてだろう」といった声が上がった。白地図の上にカードをのせていくことで、今後市町村単位にまで落とし込んでいく布石も、最初から打った。ライティングの後にYamanashi English Cardをカルタ化した教材を使い、ゲームを行った。授業者とALTが交互にYamanashi is famous for～.と読み上げるのを、みな集中して聞きながら取り組んでいた。

②第二時

前時で学習した“be famous for”を使いながら白地図にミニカードをのせて、県内でもどの市町村で有名なのか押さえていった。本時ではYamanashi English Cardをビンゴにアレンジした教材を使用した。4×4のビンゴカードにA～Zのイニシャルを入れ、Yamanashi is famous for～.をよく聞きながら活動していた。このカードはQがUnique

Grapesであったり、ZがKofu Zooであったりするため、油断していると間違えてしまう。これが児童の意識を高め、思考するための適度な負荷となった。

③第三時

三時間目はコミュニケーション活動を中心に行った。Yamanashi is famous for～.に加えて、“What is Yamanashi famous for～, especially in～?”を押さえることで、交互に山梨県の有名なものが県内の特にどの市町村で有名なのか白地図を使いながら紹介し合うことができた。カルタ、ビンゴに続き、小学校で広く行われている、交流後にサインをもらう形式にした。

④第四時

本単元は、最終的には二人一組でA～Zのうち一つのワードを3ヒントクイズにして出し合う活動を計画した。本時はその準備が活動の中心となる。小学生という語彙の面で限定的な知識しか持たない段階で、英語でヒントを作り出す活動は無理があるとの指摘もあった。しかし、児童が背景知識としてこれまでの経験からどの程度のバックグラウンドを持っているのかを明らかにしたいという点、そして、幸いにも授業者のほかにALT, JTE, 指導教官である長瀬教授、共に小学校で実習を行う現職の英語科(高校)の先生がいるという恵まれた環境にある点を考慮し、実践に踏み切った。

3ヒントクイズとはしているが、実際には3つ目のヒントはIt is in 市町村～.の形に統一している。これは、知識を市町村のレベルまで落とし込むことで社会科としての学びが達成されると考えたためである。また、児童が自力でヒントを作り出す負担感を軽減する効果を狙ったためでもある。

⑤第五時

繰り返し伝えてきたコミュニケーションのポイント「Big Voice」「Eye Contact」「Gesture」を確認して、単元のまとめとして3ヒントク

イズを行った。本時については考察の中でまとめ扱ふこととする。

(2) ワークシートの分析

児童のワークシートへの記述を見ていくと、大きく3種類の傾向に内容が分かれた。

- ①意欲に関する記述
- ②統合した教科(社会科)に関する記述
- ③英語そのものに関する記述

①は英語に限らず、学習感想で多くの児童が書いてくる「～が楽しかった。」に代表されるものである。厳密には①と②や、①と③、を併せ持つもの内容もあったが、その場合は②または③の方に分類した。なお①に関しては全員のワークシートから記述が確認できたため、今回は省略する。

最初に②統合した教科(社会科)に関する記述である。

わたしは、山梨県の有名なものは少ししか知らなかったですが、今日水しょうなどが有名だと初めてしってとてもびっくり！しました。次の授業も楽しみにしています。

この児童は新たに教科としての学びがあったことを記述している。また、「すこし」としているが、前提となる知識があったことが、さらに意欲を高めることにつながったと考えられる。

毎時間回収しているワークシートにはコメントを入れて返していた。授業時間内では全ての児童に適切なファシリテートを行うことは難しい。そこで授業とワークシートの2つを通して児童を見取った。

A～Zまでの山梨の有名なもののカードがわかりやすかったです。どうして海のものが有名なのか知りたいです。

Yamanashi English Card の E にあたる単

語(Ear Shell:アワビの煮貝)が有名なことに疑問を感じた児童のワークシートである。他にも吉田のうどんを食べたことがある、なぜこんにやくが Devil's Tongue なのだろう、といったものが出た。

～山梨でアワビが有名な理由～でアワビが有名なことがわかりました。またいろんなことを知りたいです。

それらの疑問を授業の中で適宜紹介することで児童の学習意欲の向上につながったと考えている。授業が進むにつれて、自主学習で自ら調べてくる者や、Yamanashi English Card に含まれていない特産品や名所を筆者に教えてくれる者が出てきた。これも学習意欲の向上により確認できた事例だと考える。

次に③英語そのものに関する記述である。

Minobusan Kuonji とか Crystals などをきれいに書くことができた。Epecially とか ちよっとむずかしい言葉 だけど、しっかりと音することができた。友達と交りゆうするときもしっかりさいごまで言えた。Nishijima-washi の場所もふりかえることができた。

単元も中盤となると、ワークシートの中に覚えた語彙を積極的に用いた内容が増えてきた。上の児童は“especially”が少し難しいと書いている。本来は小学校で扱う語彙ではないが、“especially in～”の汎用性の高さと、教科の学びを深めるために組み込んだ意図がある。他にも同様に感じている児童がいることを考え、次時のワークシートにモデル文を再掲載するとともに、授業冒頭に復習の時間を設けた。ワークシートは児童の学習意欲を向上させるために有効であるのみならず、教師が授業内容を修正・再構成する際の資料としても効果的である。

表 3

		とても	まあまあ	あまり	おもわない	実践前後の差 (%比較)
質問 1	前	26(74)	8(23)	1(3)	0(0)	+20
	後	33(94)	2(6)	0(0)	0(0)	
質問 2	前	27(77)	5(14)	3(9)	0(0)	+5
	後	29(82)	6(17)	0(0)	0(0)	
質問 3	前	22(62)	12(34)	1(3)	0(0)	+32
	後	33(94)	2(6)	0(0)	0(0)	
質問 4	前	0(0)	2(6)	3(9)	30(86)	-29
	後	0(0)	5(14)	10(29)	20(57)	
質問 5	前	24(68)	10(29)	1(3)	0(0)	+14
	後	29(82)	6(17)	0(0)	0(0)	
質問 6	前	19(54)	12(34)	4(11)	0(0)	+14
	後	24(68)	9(26)	1(3)	1(3)	
質問 7	前	17(48)	17(48)	1(3)	0(0)	+23
	後	25(71)	10(29)	0(0)	0(0)	

Great や Close は次の英語の授業でゲームをする時に使えるようになりたいです。ヒントを出すときも答えるときも、相手にわかりやすく伝えることは大変でしたが、はっきりといえてよかったです。

3 ヒントクイズを行う際に、コミュニケーション 3つのポイントと合わせて、Great と Close を紹介した。正解した相手を称えるだけでなく、たとえ間違えてしまっても否定されることがないようにするための配慮だった。ワークシートの記述を見ると、特に Close について触れられているものが多く見られた。「ドンマイ、みたいで便利」「間違ってもいやじゃない」等。実際に使用してみることで、言葉の意義や価値を感じ取り、これからも使っていこうとする思いを持ってくれたのならば、授業者として幸せなことである。上記のワークシートからは伝える相手意識が確認できる。

(3) アンケート結果の分析と考察

実践授業の前後で児童の英語科に対する捉えがどの様に変容するのか検証するためにアンケート調査を行った。各調査項目については山野(2013)を参考にし、1~4の選択式と自由記述式を併せて実施した。回答選択式項目は以下の7項目である。

- Q1. 英語の授業は楽しいか。(楽しさ)
- Q2. 英語がわかるか。(言語理解)
- Q3. 内容はわかるか。(内容理解)
- Q4. 授業は難しいか。(難易度)
- Q5. やりがいはあるか。(達成感)
- Q6. (異)文化のことをもっと知りたいか。
(異文化理解への意欲)
- Q7. 英語で世界の人とコミュニケーションしてみたいか。
(コミュニケーションへの意欲)

本研究の目的は児童の学習意欲を高める上で CLIL の有効性を検証することである。アンケートの中で Q1, Q5, Q6, Q7 の問いが学習意欲に直接関係があると考えた。結果を比較すると、「とても」だけに限定しても CLIL 実践の前と後では肯定的な回答が増えていることがわかる。選択式のアンケートで測れない部分は記述式の回答から見ていきたい。まず、Q1 からは、友達同士で関わり合う活動が楽しかったとする意見が多く、ほかに特徴的だったのは社会の勉強を(英語と)一緒にできて楽しかったというものがあった。最後まで統合の授業であることは児童に伝えなかったが、英語科と社会科双方の学びになったと答える児童は多かった。

アンケートの文言を工夫する必要があったと感じたのが Q1 と Q5 である。児童にとって楽しさとやりがいの違いは問いとして少々難しくなかったかもしれない。より児童にとってわかりやすい問いの設定が課題である。

Q6 について、今回の実践は異文化ではなかったため「もっとくわしく知りたいと思うことはありましたか」と質問を改変して行った。最も多かったのが、山梨のことをより深く英語で知りたいというもの。次が他の県でも同様の活動してみたい、であった。社会科の内容に関するものが多かった。Q7 は実際に外国の人に使ってみたい、が最も多く修学旅行の時に話しかけてみる、や親兄弟に実

際に使ってみたという記述があった。

アンケートを通して明確になった課題は、Q4 の難易度である。内訳を見ていくと、特に3 ヒントクイズのヒントを考える場面と問題を出す場面で難しさを感じていたことが分かった。Yamanashi English Card で繰り返し触れてきた語彙とは違い、問題を出す際に自分の発音が正しいか不安に感じたこと、また教師からアドバイスを受けるまでヒントを思いつかなかった経験をあげる児童が多かった。「思わない・あまり思わない」が 86%いるものの、14%の児童が感じた難しさは、今後の実践の中で改善していく必要がある。

実践前後のアンケートを比較し、教科横断型の学習により、児童の学習意欲向上を見込めることが明らかとなった。研究当初に筆者が持っていた課題意識から、高学年児童の知的好奇心に応える指導法として CLIL に注目し、実践を通して検証することができた。適度な負荷を与える教材と、活動を深める要素としての他教科の学び。これらを組み合わせることでオーセンティックな場面設定が可能となる。言い換えれば、英語の中にトピックとして何を統合していくのか、それを見極めることが CLIL 型の授業に必要な大切な視点だろう。

7. おわりに

以上の研究の結果から、以下の3点を本実践報告のまとめとする。

①他教科との統合により、児童の興味関心を高めることが可能である。しかし、小学校段階ということを考慮すると、あくまで **partial** なものとするのが現実的である。言語の使用場面を授業者が1時間の授業内に明確に位置付けることが、児童の学習を保証し、言語学習ばかりでなく教科学習の学びを深めることにつながる。児童の理解の様子に合わせて、日本語によるフォローも積極的に行っていくことが望ましい。

②他教科を学びながらコミュニケーションをとることで、英語学習を意識することなくインプット量を増やすことが可能である。しかし、英語を学ぶ際には、どうしても決まったフレーズや基本的な単語の知識の習得が必要になる。それらを教え込むのではなく、教科の学びの中に無理のない範囲で入れていくことが重要であると考えられる。そこからより多くの語彙を知りたいと思う気持ちや、自分の考えや思いを相手に伝えたいという思いが生まれてくる。

③小学校における CLIL 実践においては、授業者のコーディネートが重要となる。学びを深めるための場面設定や、教科と言語の内容を「どの程度」「どの場面で」「どのような方法で」取り入れていくのか考えるのは、やはり全科教員である小学校教諭ならではの視点である。同時に、小学校が CLIL に適していると再認識した点である。

授業者として実践を行い、CLIL の有効性について確かな手ごたえを感じた。今後も研究を継続し、他教科に実践を広げていくことで、小学校英語教育の新たな可能性を開拓していくことを次年度からの課題としたい。

8. 引用文献

- ・文部科学省(2008)『小学校学習指導要領：第4章外国語活動』
- ・文部科学省(2017)『次期小学校学習指導要領：第10節 外国語』
- ・池田真(2011)『CLIL 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版
- ・池田真(2013)『CLIL の原理と指導法』英語教育 6月号, 大修館書店
- ・和泉伸一 他(2012)『第二言語習得からみた CLIL の指導原理と実践』, 上智大学出版
- ・藤田(2017) 吉田研作 他(2017)『小学校英語科への対応と実践プラン』教育開発研究所
- ・山野有紀(2013)『小学校外国語活動における内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と可能性』
- ・二五義博(2015)『小学校高学年における英語科授業の実践報告』
- ・太田圭, 長瀬慶来(2017)『Partial CLIL と小学校外国語活動—小学校5年生の家庭科実践の分析から—』